

与謝蕪村と都島

47期生

I テーマ設定の理由

私の住んでいる大阪市都島区は、与謝蕪村が生まれ育った所で、石碑があるということなどは知っていたけれど、与謝蕪村の詳しいことは知りませんでした。そこでこれを機会に与謝蕪村とはどんな人だったのか、都島をどう見ていたのか、など与謝蕪村の「奥」に迫ってみようと思い、このテーマを設定しました。

II 研究方法

- (1) 現地調査 ◦ 区役所に行って石碑等について伺う。
◦ 都島区周辺にある与謝蕪村の碑等を訪れる。
- (2) 文献調査 ◦ 与謝蕪村について詳しく調べる。
- (3) 新聞の切り抜き ◦ 朝日新聞の日曜版「蕪村春秋」を切り取る。

III 研究内容

1 与謝蕪村について

(1) 与謝蕪村という人は？

1716年～1783年。摂津（今の大阪市北部）の人で、画家でもあるが俳人で、絵画的な作風で有名です。松尾芭蕉（1644年～1694年）の死後墮落していた俳諧の復興に努めました。客観的で、絵画的・印象的な描写を得意としました。

(2) 与謝蕪村の生涯

▼表1 与謝蕪村の一生

西暦 (年)	年齢 (歳)	出来事
1716	0	都島（大阪市北部）の毛馬 <small>けま</small> に生まれる。
1732	17	江戸に出て、俳人早野巴人 <small>はやの ともと</small> の門に入り俳諧を学ぶ。
1744	29	室町 <small>むろまち</small> 、宰鳥 <small>さいちょう</small> と号していたが、宇都宮で出した歳旦帖 <small>さいたんちよう</small> で蕪村と号する。
1751	36	冬に京に上る。 （京都の宮津で四年間滞在したり、讃岐へ旅をしたりする）
1758	43	結婚する。妻の名は「とも」、その後「くの」という娘が生まれる。
1783	68	12月25日、死去。墓は洛北一乗寺の金福寺の境内の中にある。

表1を見てみると、与謝蕪村が17歳頃江戸に出てからは故郷都島に帰っていません。しかし、京に住むようになってから、何度か大阪へは帰ってきています。ある時は、桜ノ宮（蕪村の家の近く）まで来てはいるもののついに故郷へは帰っていないそうです。なぜ、蕪村は近くまで来ながら故郷へ帰らなかったのでしょうか…？

2 与謝蕪村の碑等

都島区周辺での蕪村の碑等は次の五つです。

- ・蕪村句碑
- ・蕪村生誕地碑
- ・源八の蕪村句碑
- ・春風橋
- ・蕪村旧句碑

(1) 蕪村句碑（写真1）

☆所在地 都島区毛馬3丁目7番地先、
淀川堤防上

☆建立者等 昭和53年2月（1978年）淀川
改修100年を記念して、建設省、大阪府、
大阪市、蕪村保存会（下記参照）が建立。

☆碑文 「春風や堤長うして家遠し」
蕪村直筆より引用。



▲写真1 蕪村句碑

？蕪村保存会とは？
会長は西海氏（死亡）。旧句碑は、
現句碑の東側30mの堤防下にあったが、
閘門改修工事（1972年）時に、一時淀
川中学校に預けられ、工事終了後に元
へ戻すべきところ、文字の一字が間違っ
ているため現句碑作成、寄付募集のため
に結成されたもの。現在、会員もな
く実体として存在しない。

(2) 蕪村生誕地碑

☆所在地 (1)と同じ
☆建立者等 昭和54年（1979年）、
大阪市が建立
☆碑文 「蕪村生誕地」

〈蕪村礼讃〉…蕪村句碑の横にあった立て札より引用。

「碑面の「春風や堤長うして家遠し 蕪村」

の句は安永六年（1777）蕪村62歳の正月に出した春興帖「夜半楽」の中の「春風馬堤曲」の第二番目の句である。

「春風馬堤曲」は、蕪村が故園の毛馬に対する強い郷愁の思いをうたった異色の作品である。

「春風馬堤曲」は、俳句、漢詩、それに和詩を交えた十八首から成るものであって、それは、大阪からやぶ入りで毛馬へ久しぶりに帰る若い娘の気持ちになって、蕪村自身の郷愁の思いを詠んだものである。

…（中略）…

蕪村は、こよなく故園の毛馬を愛した人であり、それをまた誇りにしたのである。この碑面の句は、このように蕪村の毛馬に対する郷愁をこめた句であるから、毛馬にあって蕪村を慕い、蕪村を記念するにはまことに適当なものである。

この句を口ずさむことによって、いつまでも蕪村の偉大な業績とその人柄をしのぶのである。

このような人を生んだのは、毛馬の大きな誇りである。

毛馬の人蕪村、これは永遠にわれわれの誇りでなければならない。』

(3) 源八の蕪村句碑（写真2）

☆所在地 都島区中野町4丁目16番地
中野幼稚園内

（私が卒園した幼稚園です。）

☆建立者等 大正11年（1922年）

俳人青木日斗が建立

☆碑文 「源八を渡りて
梅のあるじかな」

※この俳句に使われている源八とは今のJR大阪環状線桜ノ宮駅付近のことで、昔渡し舟が大川を渡っていました。



▲写真2 源八の蕪村句碑

(4) 春風橋（写真3）

☆所在地 都島区友洲町1丁目1番地と同区毛馬町1丁目1番地との間

毛馬桜ノ宮公園内の北大阪周遊自転車道（府道大阪吹田自転車道）の一環として建設。名称は、蕪村の句碑にちなんでいます。

☆建設時 昭和56年（1981年）

☆大きさ 長さ105m幅3m

写真3では、この道をまっすぐ進むと「蕪村句碑」、「蕪村生誕地碑」のある場所へ行き着くことができます。



▲写真3 春風橋とそのながめ

(5) 蕪村旧句碑（写真4）

☆所在地 大阪市北区長柄東3丁目3番地25号

建設省淀川工事事務所毛馬出張所敷地内

☆建立者等 昭和28年3月（1953年）建立者4名（姓名判読できず）

☆碑文（表面）俳聖蕪村之顕彰碑

「春風や堤長うして家遠し」

（裏面）谷口蕪村出生地此所在地ヨリ

北方約三百米突ノ地点ニ在リシ、昔時毛志馬ト称スル所ニ在リシモノナリ

現在ハ新淀川本流ニナリオル所

紀元二千六百十三年弥生講話成立紀

昭和二十八年己癸建立

建立者（4名 判読できず）

☆大きさ 高さ約50cm、幅約70cm



▲写真4 蕪村旧句碑（表面）

○与謝蕪村の碑等の場所は？

- ①蕪村句碑
- ②蕪村生誕地碑
- ③源八の蕪村句碑
- ④春風橋
- ⑤蕪村旧句碑

JR大阪環状線の大駅と京橋駅とに近だけあって、都島区は都会の真ん中です。特に大川の川沿いは、今、近代的なマンションやホテル、ビルなどが建設中で、これからもどんどん都市化が進むでしょう。しかし、私たちの身の周りには、蕪村の碑などのように歴史的な物も探してみればかなりあります。そしてそれをこれからも大切に守っていくことは私たちの役目であり、義務でもあるのです。



▲図1 都島区周辺の蕪村の碑等の図

3 与謝蕪村の俳句の鑑賞

与謝蕪村は、絵画的な作風で有名だと言われますが、本当はどうなのでしょう。次は与謝蕪村の俳句についての特徴、自分の故郷、都島を想って作った俳句も取り上げてみます。

○やぶ入や浪花を出て長柄川

淀川の東岸の毛馬堤は、蕪村の出生地です。長柄川とは淀川が毛馬堤の辺りから西へ向かう新淀川の旧名です。この句は、毛馬の堤から長柄川をのぞんで、帰郷の実感を噛みしめているつもりなのでしょう。

○春風や堤長うして家遠し

「蕪村礼讃」の立て札にもあったように、大阪からやぶ入りで毛馬へ久しぶりに帰る若い娘の気持ちになって、蕪村自身の郷愁の思いを詠んだものです。「やぶ入や浪花を出て長柄川」との二句が、郷愁の思いを詠んだ句として有名です。

○菜の花や月は東に日は西に

この句は蕪村の句の中でも最も有名な句です。日は西に傾き、菜の花畑の色の美しさと東の空の大きな満月の組み合わせが素晴らしいといった感じです。その素晴らしい情景が目浮かぶようなきれいな句だなと思います。

○春の海終目のたりのたりかな

海辺で春の海を眺めていると、終日風らしい風もなく、静かな波が寄せては返して、本当にのどかな景色で、つい居眠りをしてしまいそうな句です。

○夏河を越すうれしさよ手に草履

一読して爽やかな印象を与えるこの句は、蕪村らしい句だとする人が多いようです。渡ると決めた軽い冒険心、肌に触れる水の涼感、それらが呼ぶ高揚感などがうまく表現されています。

蕪村の句の特徴

蕪村の句は、絵画的な作風で知られていますが、やはりその情景を思わせるような上手な句が多いようです。ある人は、蕪村の句はルノワールの絵を感じさせると言います。それだけ奥が深そうに見える、ということです。また、故郷を想って作った句が比較的少ないのも特徴です。

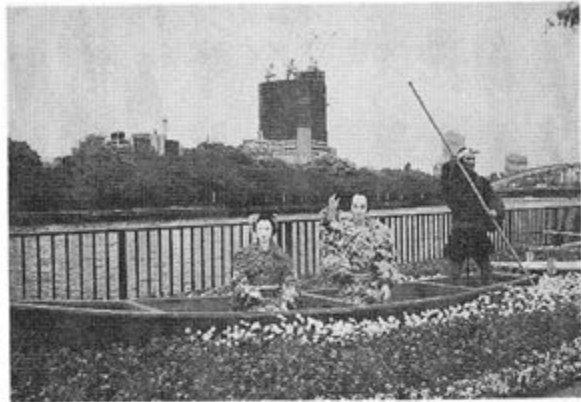
4 与謝蕪村と都島との関係

(1) 与謝蕪村は都島をどう見ていたのか

「蕪村礼讃」では蕪村は故郷を愛し、郷愁の思いをうたった句は多数あるとありましたが、他の意見もあるようです。蕪村は、故郷を訪れたことは一度もなかったし、故郷を想って作った句もあるにはあるものの少数です。だから、井原西鶴（江戸時代の浮世草子の大成者）や近松門左衛門（江戸時代の人形浄瑠璃、歌舞伎の作者）のように大阪の人とは言えない、と言うのです。蕪村にとっての都島というのは、ただの故郷ではなく蕪村の過去と未来のもろもろの思いの果てのことだった、という意見です。

(2) 都島の人々は与謝蕪村をどう見ているのか

蕪村は、都島の人々にとって永遠の誇りであるようです。しかしそれは一部の人達だけであり、大半の人は蕪村が都島の人であることすら知らないようです。一部の人達は、毎年秋に区内のホテルで蕪村を偲び、句会を開いています。しかし、蕪村が都島の人だということを知ってもらうために、今春「花いっぱい祭」という催



▲写真5 花いっぱい祭り

IV 結 論

与謝蕪村は故郷—都島、毛馬を後にして一度も帰らなかったのですが、都島は蕪村の誇りであったようです。しかし、他の意見によると蕪村は都島に対しては誇り以外の何か深い思いがあったとも言われています。意見が2つに分かれたのですが、私は後者の意見に賛成したいです。近くまで帰ってきたこともあるのに一度も故郷には帰らず、故郷を想う句も少ない。都島への何か思いがあったに違いありません。いずれにしても、蕪村は200年強経た今でも都島の人々に大切にされています。そして、これからも愛され、誇りとなっていくことでしょう。

V 総 括

与謝蕪村と都島との関係を調べ終わった今の感想は、研究は調べれば調べるほど奥が深くなっていくんだなあ、ということです。調べていくほど、いろいろな人の意見が出てきて頭が混乱したこともありました。今回の自由研究のテーマは難しいもので、論文を解説するに当たり親と一緒に苦労したりもしました。しかし、努力したかいあって、素晴らしい研究が出来ました。そして、区役所を訪れ話を聞いたり、初めて大阪府立中之島図書館へ行き、本の多さにびっくりするなど貴重な体験もさせていただきました。これらの貴重な体験をバネにこれからもいろいろなことにチャレンジしていきたいです。最後に、区役所で話をしてくださった職員さん、一緒になって石碑を探してくださった建設省の方々などたくさんの方々にご迷惑をおかけしました。おかげでとてもいい研究ができました。ありがとうございました。

・参考文献

- ・源啓一郎 (1975)「蕪村と淀川」大阪春秋第6号 大阪春秋社 pp.96-101
- ・藪内吉彦 (1983)「建碑を訪ねての歴史散歩道」大阪春秋第36号 大阪春秋社 63P

し物が大川沿いで開かれました。その時、写真5、6のようなものがあり、蕪村の時代の様子がよく分かるようになっていました。このような催しが行われるのも蕪村が都島の人々に愛されているからに違いありません。これからも、蕪村は都島の誇りとなり、愛されていくでしょう。



▲写真6 立て札